

【緑地を楽しむ本】

『冬芽ファイル帳』

鈴木純 著 小学館



前回に続いて、鈴木純さんの本です。木々は葉を落とし、何もない冬・・・でも、「植物観察は冬が楽しい！」という著者。冬は寒さと乾燥という大敵から、春になったら芽生える芽を守らなくてはなりません。その守り方が木によってもいろいろで、その必死さが私たちから見るとユーモラスな表情に見えたり、美しく見えたりするのです。

著者はそれらの冬芽を、「冬芽界のカオナシ」とか「気分はボクサー」など、楽しく特徴を捉えて伝えてくれます。それに添えられた写真もタイトルそのもので、著者の冬芽への愛情が伝わってきます。なにより、私もこの冬芽を見てみたい！という気持ちになるのです。

取り上げられている木々も比較的身近なものばかりです、緑地でも見られるものもいくつもあります。例えば、「見つけられるかな？」と書かれている、ヤマブキ。20倍に拡大された写真では可愛い顔が見えるのですが、実際には小さすぎてなかなか見つけられません。でも春になればちゃんと芽から黄色く色づいた花の蕾が出てくるし、小さく葉っぱも出始めます。まるで春を喜んで踊っているような、葉っぱの赤ちゃん。えー、こんなに可愛いの？これは、チェックしなくては！

この本を手引きに、冬の自然と仲良しになりたいと思いました。

(小川)